大海嘯大慘害
義捐金の募集

今回管內南、東、北閉伊。氣仙。南、北九戸。各郡の大海嘯たる人命を害ふこと殆んど二萬有餘全町村覆沒流離其形跡を留めざるもの亦少からず幸にして万死の中一生を得たるものも或は傷痍に悩み或は飢餓に迫られ鰥寡孤獨其恃賴する處を失ひ居るに家なく食ふに食なく着るに衣なく悲慘の極酸鼻の至り實に前代未聞の大事變に屬す苟くも帝國臣民たり同胞たる者は豈袖手傍觀するの秋ならんや況んや同一の治下にあり同一の縣民たるものをや籍ふて賑恤扶助の事實に刻下焦眉の急務たり本社自ら揣らず率先以て義金募集の勞を執り聊か同胞相恤の微旨を徹底せんとす仰ぎ願くは大方慈仁の諸氏切に此擧を贊成せられ多少に拘らず續ゝ義捐あらんことを即ち義金募集の手續きは左の如し

一 義捐金額は各自の隨意たるべき事

一 義捐金募集の期は來る七月十七日迄とす

一 義捐金は義捐者の姓名と其金額とを本紙に揭載して受領證に換る事

一 義捐金は一括して本縣廳に配付の取扱方を依賴する事

明治廿九年六月十八日

巖手公報社

雜報

◉敍任及辭令

任山形縣書記官（敍高等官六等）　岡山縣警部長正七位　床次竹二郎

任岡山縣警部長（敍高等官六等）　石川縣參事官正七位　櫻井鐵太郎

任石川縣參事官（敍高等官七等）　滋賀縣參事官從七位　渡邊長謙

依願免本官　山形縣書記官　岩淵惟一

歸朝ヲ命ス　特命全權公使男爵　西德二郎

非職ヲ命ス　臨時横濱築港局技師　山崎鉉次郎

宮城縣巖手縣青森縣ヘ出張ヲ命ス　內務省參事官　久米金彌

九州種馬牧場長心得ヲ命ス　種馬牧場技師　水原勝之助

◉侍從差遣

今回の海嘯上聞に達し東園侍從被害地視察の爲め差遣はさるゝやに洩れ聞く

◉原公使の出發　朝鮮全權公使原敬氏は來る廿三日京地出發仝廿五日に神戸港出帆の筈なり

◉種馬場長の任命

（十八日午後二時半東京發）

丹下兼吉氏は巖手縣種馬場長心得を命ぜられ宮城縣種馬場長を兼任す

◉常置委員會　再昨夜九時半常置委員臨時召集せられ救助費等支出の件に付諮問會を開かれ十一時退散せられたり

◉出張　技手一條牧夫氏は宮古地方へ出張を命ぜられ一昨十八日夜急行にて出發せり

◉國民協會の視察　國民協會にてはツナミ被害視察のため幹事藥袋義一氏を派遣せり

◉各町村長定集會　南北巖手紫波郡役所內に於て同郡內各町村長諸氏は昨十九日午前九時より定集會を開らき今回の罹災者救恤義捐の件及も協議せるよし

地方税より三万圓補助の追願書起草委員より報告となり其の費用支出上に就き少なく論辯ありしも結局同案に可決せり右にて深見技師は閉會を告げ午後三時散會したり

◉技手增給　本縣技手野崎鎌太郎氏は六級俸に同一條牧夫氏は九級俸に何れも一昨十八日昇給せり

◉被害者義捐金　岐阜縣々會常置委員山田靖三郎氏より本縣下大海嘯被害者へ救恤として金五圓贈付したる旨本縣常置委員へ電報にて申越せりと

◉豫托軍馬引揚げ　昨十九日より來る三十日頃までに豫托軍馬引揚げとして陸軍屬寺島壽氏外一名出張せり

◉吉田技手　も昨日氣仙郡へ出張

◉久保田警部　前項電報欄內にも見ゆる如く東園侍從は本日の直行列車にて來盛せらるゝに付き久保田警部は右出迎として昨日縣界迄出張

◉原縣屬　は一昨日[illegible]慈方面へ救護の爲め出張

◉赤十字醫師調劑員看護人出張　東京本部なる日本赤十字社より醫師三名調劑員二名看護人八十名昨夜の終列車にて來盛今朝宮古方面へ向け出發の筈尚は醫師三名看護人十名を同社へ請求せし處同社にて承諾不日來盛の筈

◉第二師團　軍醫四名看護人四名本縣の依賴に應じ昨日救護として花卷停車場より下車釜石方面へ向け出張

◉平田代議士　は昨十九日來盛直に警察部に出頭し被害者救恤義捐の事に就き北田警部に面會せり

◉大海嘯大慘害彙報（[illegible]）

◎自由黨本部の特派代議士　今回の凶變に就て自由黨本部よりも慘害實況視察として代議士江原素六氏を特派せし同氏は昨日上野發一番列車にて京地を出發せり尚は本縣撰出の同黨代議士も同氏と同行すべしと云ふ

◎久慈町及附近被害狀況　同町は家屋破壞百餘戸死亡四百餘名負傷二十八名野田は破壞家屋九十七餘死亡二百五十八名餘負傷四十名餘村役場、學校、駐在處破壞巡査遊座某家族三人と共に死亡宇部は破壞家四十八餘死亡百六十餘名負傷未詳種市は破壞家屋三十餘死亡百餘名負傷未詳侍濱破壞家屋五十餘死亡百餘負傷未詳久慈野田は慘狀最も甚し

◎小本田野畑普代地方の慘狀　同地方は被害當日（即ち十五日）の四五日以前より天候不順冷熱甚度を失し或は雨となり或は風となり地震又屢々至り多少天變地變の兆候ありしも如斯一大事變の現出するならんとは誰人も豫想の外にして特に天災の當日の如きは舊曆端午の節句に屬し工商何れも業を休み一家團欒親戚故舊相會し祝酒を傾け歡笑に餘念なかりしに同日午後八時頃に至り海面の方位に於て俄然一發砲聲の如きを耳にするや沿海人民は定めし軍艦の發砲ならんと敢て意に介しさるものなく歌舞歡談しつゝありしに計らざりき激浪怒濤滔々山岳を崩すが如く凄じき勢ひにて壓倒し來りたるにぞ周章狼狽驚愕悲泣の極親子弟妹相顧るの遑なく二階に避くるもあり哀號して救護を求むるものあり當夜とて特に梅雨濛々として黯黒咫尺を辨せざる程なれば全戸擧ッて溺死する者亦鮮からず九死を免れたるものも負傷し歩行自由ならざるのみならず家財田畠悉皆流失し住むに家なく食ふに食なく慘狀筆紙の悉し得べきにあらず扨て被害の最も大なるは小本村にして同村字小本中野小成の三ヶ所にして流失せし家屋は合して百三十戸死亡人員は三百六十七名普代村に於ては字太田名部は四十二戸の內流失せざる者僅に一戸人員生殘せるもの僅かに十一名同字普代は廿戸流失字澤は七戸流失死亡人員未詳は田野畑ハ字羅賀三十四戸の中廿戸流失死亡人員未詳同島の越は流失家屋大凡二十戸死亡人員は大凡七八十名其他罹災地に於る負傷者夥多にして救護に手を盡すも部內四名の醫師の中二名は負傷用を爲さず他の二名にて間に合せ居り慘狀云ふべからずと十八日發の通信にありたり

◎小本村慘害狀況　小本村實況視察者の言に依れば小本川口海岸より上流廿餘丁の間一望赭黒の泥地と變じ凄慘の狀人をして栗然毛骨を寒からしむ海岸に相對する字中野の山麓を見れば屋舍家財の堆積丘を爲して數丁に連り其間點々死屍の介在するを見れば死體の多くは此中に埋沒せられたるべし酸鼻の至りなり中野は五十八戸の中死亡を免れたるもの僅かに十餘戸然も傾覆破損を免れず人命を害ふ三百の多きに至り生存するもの三分の一に過ぎず又一家皆生命を全ふしたるもの二三に過ぎずして他は悉く親を失ひ子に離れ全家滅亡せるもの少からず尚は災害當日生存者に聞くに午後七八時頃地震ありシカも敢て意に介する程にてもなかりしかば各々一家團欒端午を祝するの折に際し俄然迅雷の如き激浪怒濤壁を倒し柱を摧きて襲ひ來り戸外に出るの暇もあらばこそ遂に形の如くの慘害に罹りたる次第なり尚は激浪怒濤の河口海岸に於て平水より八十尺以上に達したる以て其猛烈なる一斑を推知すべく被害樹木は轉覆せるにあらざれば挫折し枝葉と表皮とを止めず屋舍の水際以上に押上げられ二階造りの家屋の下部は突折して上層は其儘變異なく陷落せしを見れば惡浪凶暴の勢人をして寒からざるに汗せしむ人夫不足にて屍体の發掘散亂しさる家財の蒐集等は手廻り兼ね居る酸鼻至極中野に通ずる縣道は流潰の家財家屋の堆積の爲め通行叶はず小本橋は橋柱二本上流に傾き存れ微かに其の位置の名殘りを止め同處は舟便にて往來せり云々

◎小友村の慘狀　氣仙郡小友村の慘狀の實見者たる千葉某の急信に曰く六月十五日午後八時雷の如く地震の如き響俄然として起り次で吶喊叫喚の聲凄じく起れるにぞ予も蹶起して之を望めば東方に當りて煙焰空を沖き次ひて警鐘の音鏘々たり是れ非常事なりと予は夫れより勇を鼓し予が家を距る二百間餘即ち長洞平田方面に到れば海濱を距る七十間の處に波濤の痕を見る進で海濱に近ける路傍一老婆の深泥の中に蠢動し居るを見る予之を扶け起し偶々隣翁某來りければ之を負はしめ他の叫喚の聲を目的として田疇の間を徒渉すれば十二の男兒十三四の女兒裸体の儘田中に蠢動しあり予之を扶け起し傍岸の人を喚て一兒を負しめ他の一兒は予之を扶けて岸頭に到しむ而して又他の叫喚者を救はんとして進行せるに蘆沼の中に一人の蠢動せるを認む此時家弟某來合せ泳ぎ至りて之を救ひ出せる氣息奄々たる一老翁なり即之を扶けて安所に置き更に他の叫喚者を救んとせしに海中なれば救ふに由なし而して此の邊一体は家なく土藏なく木材散在して容易に歩行すべからず還て濱路に引返せば麥畑となく田となく汚泥滿々たる間に穀俵あり箪笥あり皆散亂收拾す可らざる長洞東方唯田に進んとして路を辿り行けるも木材屋根等の流寄るもの算を亂して山の如く到底進行の由なし更に路を轉して ロンデン（原文の儘）崖上に到れば崖下一面波の爲めに洗ひ去られ曾て一宇の全きものなく八十有餘ハ家屋跡方もなし崖上にありて暫し休息するに唯遙かに叫喚の聲の夜陰に凄じきを聞く此時一友亦來り會す乃ち勇を鼓し相携へて崖路を下り此の叫喚者を救はんとせ然れども路の下るべきなし蔦蔓を探り縋りて下らんとして及ばず依りて崖の中程より至り金比羅神社のありし處に來れば該社已に波濤に洗ひ去られて唯一片の斷礎あるのみ辛くして下り進んで叫喚者を尋ね行けば一老婆の一孫を擁して顛屋の下に悄然として控へ居たり予即ち老婆を負ひ一友其の孫兒を扶け先づ崖上に上らしめたり此時對岸炬火十餘點を認む呼んで連絡を通せんとすれども彼れ來らず予等進んで彼等に近づかんとして一條の河川に阻てられ如何ともする能はず潮水漸く退くを待ちて一躍之を越へ又一友と邂逅し相促して行く時に一材木の下に五六歳の男兒の横倒しあるを見る予之を抱き起し塵芥を拂ひ之を介抱するに尚は体軀に微溫あり之を摩擦するに稍々口を動かし氣息あるに似たり依て一學生をして負はしめ之を附近の醫院に送り到れば他に二名の絶息兒童を治療しつゝありき一老翁は已に死して起たず他の一壯丁は重傷を負へたるも元氣頗る壯んにして罹災當時の慘狀を說きつゝあり是れ予が實際たちさわりし一斑なり餘は推知すべし云々

◎田老、重茂及附近慘狀　東閉伊郡內に於て最も慘狀を極めたるは田老村にして全村內大字田老は大凡そ三百戸人口千八百八大字乙部ハ百六十戸人口九百人ありしに今回の凶變に就て山間高處にある戸數大凡七十戸を除くの外悉皆流失死亡者は一千四百餘名の多きに達し生存者は僅かに百名內外に過ぎざるも其の生存したるものも重傷輕傷を負はざるもなき而して生存者の半數は當日沖合遙かに漁獲に出で（沖合には何の異狀もなかりし由）たるものと其の半數は樹根等に引き掛りて辛くして免れたるものゝみなりとぞ右の如き次第にて駐在巡査役場吏員教員等殘らず死亡し伏屍累々目も當られざるの慘狀加ふるに一粒の米粟なく又死屍を取片付くるの人夫なければ警官郡吏等の盡力にて宮古より食糧人夫を派遣し又醫師佐々木某が幸ひに此の凶變を免れたるも藥品なくして負傷者の治療に從事する能はざれば是亦宮古より藥品等を調達寄贈して一時の救護に尽力しありとぞ仝重茂村は亦慘狀を極め五十二三戸の家屋建造物は悉く流失して毫も形影を止めず死者二百余名にして屍体を發見したるは三十名に過ぎず家畜全部死亡流失せりと仝字音部は海岸に沿ふたる個所十七戸流失死亡者二百余名死体を發見せしは二名に過ぎず仝字姉吉は全部十一戸流失死者六十五名にて生存者たるは二名に過ぎず仝字千鶏は十七戸流失死者八十二名仝石濱は十七戸流失死者六十四人仝川代は十五戸全部流失死者六十八人にて即ち重茂全村流失戸數百三十八死者は七百名食料は全く宮古より送り津輕石より醫師大島某出張傷者救護中なりと磯鷄村も流失戸數百二十戸死者八十名負傷者百四名あり以上十八日發宮古よりの急信

◎咄々憎むべきの奸徒　今回の一大凶變に就ては國民一同に皆痛嘆悲愁に堪へざる不幸なる罹災民人を救恤扶助の事に鞅躬斡旋しつゝあるとなるに咄々不埒千万憎むべき奸徒とも云ふべきは東閉伊郡宮古町の或る米商共は罹災地各地米糧の欠乏を奇貨とし此際奇利を攫まんと所藏の米穀を推し隱し品切れの体に裝へ居たるを早くも同署警官の聞知せる所となり其の奸商等に就て米倉を檢查したるに品切れどころか十日や二十日は充分供給せるに差支へなき米穀を貯藏しつゝあることを發見せしかば警官は痛くその不心得を詰責し尚は此場合深く事体を考へ一身の私利に迷はざる樣諭示したりとぞ云へり呆れハテたる奸商とも哉

◉沿道各地へ注意　本縣警察部に於ては今回の海嘯事變に付き各府縣より慰問幷に實地視察旁々來縣者多かるべければ各地沿道に於て此等に對し不便を感ぜしめざる樣注意致すべき旨夫々達せられたりとぞ

◉實況具申　師範學校訓導勝部偉太郎氏は兼て單級教授法に付南九戸郡久慈町へ出張中の處一昨十八日歸盛に付直ちに縣廳へ出頭同地の慘狀目擊實況を具申せりと

◉大海嘯の原因

今回の大海嘯は如何なる原因よりして起りたるか[illegible]意見の概要を擧ぐれば左の如し

◎海嘯は如何にして起る乎　海嘯の起る原因は之れを約言すれば二種に歸す則ち一は暴風、他は地震なり暴風より來る海嘯は例せば洋心に於て大暴れのありし結果として海水を激揚し其餘波延きて陸地を侵すものにして大浪の更に幾層大なるもの如し地震より來るものは海中の地盤滑り又は火山派の爲め地磐の隆起する等の事變より海水を震蕩して陸地を侵すものなるが海嘯は何れかと云へば寧ろ地震より來るもの多し

◎今回の海嘯は地震より來れり　去る十六日の氣象を云へば低氣壓朝鮮に在り高氣壓北海道の釧路邊りに在り數日來の天氣と合せ考ふるに地震を憂ふる方の側なりと云へば餘り好氣象には非れども暴風の心配は更に無き天氣なりしのみならず海嘯の中心たる釜石附近を始め全國至る所多少の地震あらざるは無く青森の如きは微震ながらも前後合せて十六回の地震あり東京の如きも去十七日朝迄に三十餘回の微震ありて何れの處にか大地震の在りしは明瞭の事實なる故今回の海嘯は無論地震より來りたるものに相違なし

（未完）

この紙面の著作権は岩手日報社が保持しています。無断転載、複製及び配布は禁止します。